

女子高生、中古音を学ぶ(4)

中村雅之

1. 只管筆写

大学受験真っ最中の同級生たちを横目に、すでに合格が決まっている若菜の一日は実に優雅である。午前中は中国語・ロシア語・ドイツ語のラジオ講座を聴いた後、楷書と仮名の臨書に没頭する。書道部の活動からは身を引いたが、毎日墨の匂いを嗅いでいないと落ち着かないのだ。

午後には高校に出かけ、ロシア語やドイツ語の文法書を読んだり、仙人の中古音講義を受けるための準備をする。3年生の授業は1月末で終わっていて、2月は希望者が午前中に科目ごとの講習を受けるだけなので、午後の教室には誰もいない。

とある水曜日の午後、若菜は唐写本の切韻残巻と格闘していた。先日、仙人の家で見せてもらった切韻残巻のカラー画像に心躍るものがあったので、家に帰ってから自分でもフランス国立図書館の電子図書館 Gallica のウェブサイトで行くつかの写本画像をダウンロードした。そして、あれこれと眺めているうちに、自分の手で書き写したくなったのだ。今は誰もいない教室で、ペリオ文書 P4917 の画像をタブレットで拡大表示させ、いつも持ち歩いている筆ペンで大学ノートに模写しているところだ。



P4917、Gallica より

自宅で毎日やっている名品の臨書とは随分勝手が違う。筆写に慣れているとは言っても、唐写本の文字は運筆の癖があったりカスレがあったり、何より初めて目にする字も多いので、判別に時間がかかった。1時間ほどかけて、一枚の残葉をなんとか写し取った時、担任の葵（あおい）先生が入って来た。

「あら、居たの？ちょうどよかった、掃除するから手伝ってくれない。最近生徒がバラバラに来るから、教室をまともに掃除していないのよ」

「了解です。モップ掛けしますね」

若菜が床を拭いている間に、葵先生は生徒たちの机を拭いてゆく。順々に拭いて、若菜の机に来ると、広げられた大学ノートに書かれた切韻残巻の模写を眺めた。

「これは……切韻残巻の模写か。さすが書道部、細かい所までよく写している。ふーむ、模写した残巻は、かなり初期の写本だね。たぶんP4917かな？」

「え、ど、どうして分かるのですか！実物の画像ならともかく、私の模写を見て資料を特定できるなんて！いや、それ以前に、資料番号なんかいちいち覚えているのですか？」

2. 原本切韻の写本

「若菜はどうしてこの写本を選んだの？」

「理由は二つあって、まず文字が整っていること、そして注釈がとっても少ないことです」

「そうね。意味に関する注釈を義注とか訓注というのだけれど、このP4917は他の写本と比べても義注が少ないし、増加字と思われるものもない。そして、義注の内容が逸文と一致していることから、陸法言の原本切韻に極めて近いと考えられる数少ない写本の一つなの。まあ、その筋では有名な写本ね」

「イツブンというのは何でしょう？」

「現在に伝わっていない書物の文章が、他の著作に引用されて残っているものを逸文という。切韻系韻書の逸文は日本の書物に大量にある。それらに‘陸法言曰…’として引用されているものを見ると、P4917の義注や反切とよく合うので、ほぼ原本切韻と仮定しても齟齬がない」

「なるほど。でも、私の模写を見て、すぐにP4917の模写だと分かるのは、何か理由があるのですか？」

「もちろん。反復記号の分布状況を見ればこれが最初期の写本だということが分かる」

「反復記号……ですか？」

3. 反復記号「と」の分布

「例えば、国語辞典を見ると、説明の中の例文で見出し語にあたる部分を直線で示したりする。試しに、あなたの電子辞書で‘躊躇’と引いてみて」

「はい。ええと、‘ためらうこと’という説明の後に、‘返答を一する’という例が載って

います」

「その‘一’は‘躊躇’の代わりね。辞書編纂者には決まった呼び名があるかも知れないけど、普通はこの記号を反復記号とか省略記号、あるいは重文字号・重文符号などと読んでいる」

「それが切韻残巻と関係があるのですか？」

「この直線の反復記号の使用は、10世紀のいわゆる五代十国の時期の版本に遡る。その時代の切韻残巻の実例を見てみようか」

と言って、葵先生は教壇の脇の棚からノートパソコンを取り出して、画像を表示させた。

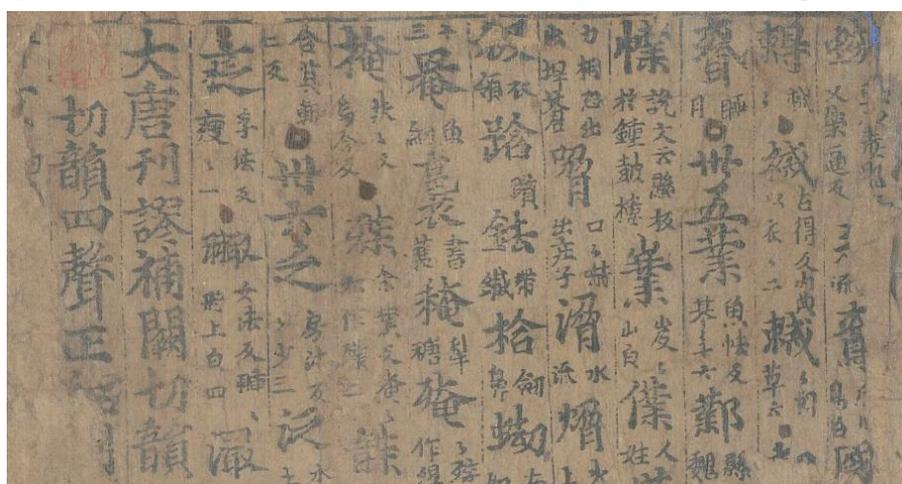
「これは IDP (International Dunhuang Programme) という敦煌資料を紹介しているウェブサイトで公開されている Ch. 3715 という資料だけど、直線の反復記号が見えるでしょう」



<https://idp.bl.uk/collection/F77DB37EBEE04D0D8F3D2A417D91C8CB/>

「ははア、左端の‘眷’に‘一属’とあるのは、眷属のことですね」

「他にもたくさん見える。例えば中央の‘箭’にも‘草名似覆盆/尔疋云一山莓’とある。この義注の後半は、尔疋に云わく、箭は山莓なり、と読める。このような‘一’の用法が、現代の日本の国語辞典にも受け継がれているというわけ。そして、9世紀までは、あるいは10世紀初頭までかも知れないけど、この反復記号の形状は‘と’だった」



P2014 第9葉 (部分)、Gallica より

「これは9世紀後半か10世紀初頭のものと思われる版本だけど、4行目の‘糞’の義注に‘炭と/山貞’とあり、5行目の‘嚙’の義注に‘口と嚇/出庄子’とあるのが分かる。それぞれ‘炭と’は‘炭糞’のことで、‘口と嚇’は‘口嚙嚇’のこと」

「なるほど。反復記号についてよく分からずに写していましたが、見出し字の代用というか、繰り返しということですね」

「若葉が写していたP4917をもう一度見てみようか」



P4917 (部分)、Gallica より

「P4917の反復記号は五代十国時期の版本と比べると、形状以外にも用法に明確な違いがある。2行目に見える‘嚇’に‘と食或作啖/徒敢反三’とある。これは、嚇は食なり、あるいは啖に作る、と読めるから、‘と’は見出し字‘嚇’の代用ということで問題ない。でも、例えば、1行目の‘攬’の義注‘撤/攬’とか、4行目の‘養’の義注‘洗養/水’を見ると、反復記号を使っていないでしょう」

「本当ですね。どうしてでしょう？」

「実は初期の写本では反復記号の使用位置に制限があることが分かっている。つまり、初期の反復記号は見出し字のすぐ下の位置、義注の第1字でしか使えなかった。次の時期になると、見掛け上は見出し字直下になる義注の2行目第1字でも使うようになる。そして最終的にはどの位置でも自由に使うようになった。変遷のイメージを表にまとめると、こんな感じ」

< A型 : 8世紀前半まで >	< B型 : 8世紀中頃~9世紀初頭 >	< C型 : 9世紀中頃以降 >
嚇 と食或作啖…	嚇 と食或作啖…	嚇 と食或作啖…
攬 撤/攬	攬 撤/と	攬 撤/と
養 洗養/水	養 洗養/水	養 洗と/水

「各段階の時期はどのようにして分かるのですか？」

「半分は妄想ね。でも、王仁响の刊謬補缺切韻 (706年) の写本P2011がA型に属してい

るから、8世紀前半までA型というのは動かない。そして、‘大唐刊謬補缺切韻’と題された唐末の版本が全てC型だから、B型は最大限8世紀半ばから9世紀前半の範囲に収まる」

「それで、私が模写した写本はA型に属していたから、最初期の写本ということが分かったのですね」

「なにしろ、A型に属する写本は3種しか知られていない。先ほど言及したP2011以外には、このP4917と英国のスタイン文書S2683だけ。しかも、P4917とS2683は書体が同じで、同一写本から分かれたものだと分かっている」

「つまり、私のノートに写したものがA型だったのを見た瞬間に、3種の写本のどれかに違いないと」

「しかも、一枚だけの残葉はP4917だけだしね。ちなみに、世間的には片割れのS2683の方がはるかに有名な写本だね。S2683という写本は、王国維という天才的な学者が1921年に初めて世に紹介した3種の切韻残巻のうちの一つで、切韻残巻第一種、略して‘切一’と呼ばれている。王国維の見立てでは、書体から判断して初唐の写本だろうということだったけど、反復記号の使用法からもそれが証明されたことになる」

「うーむ、こんなちっぽけな記号からも、いろいろな事が分かるものですね」

「こういうのも文献学の面白さの一つかな」

4. 韻鏡という韻図

数日後、仙人の家へ行き呼び鈴を鳴らすと、奥の方から上がってくれという声が聞こえた。そのまま入ると、仙人はパソコンの前に座って、資料を何枚もプリントアウトしていた。居間のソファに腰掛けて待っていると、仙人は印刷された数十枚の紙を若菜に渡した。その全てに何やら図表が印刷されている。

	齒音舌	音	喉	音	齒		音	牙	音	舌	音	唇						
	清濁	清濁	清濁	濁清	濁清	濁清	清濁	濁清	濁清	濁清	濁清	濁清	清濁					
	○籠	○洪	○烘	○翁	○摠	○叢	○忽	○變	○峴	○空	○公	○同	○通	○東	○蒙	○蓬	○	○
東	○戎	○隆	○彤	○雄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○融	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
董	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
送	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

「これは『韻鏡』という資料だ。今日はこれについて見ていこう」

「インキョウですか？」

「うむ。まあ、簡単に言えば、五十音図の中国版だ」

「五十音図というと、音節表ということですか？」

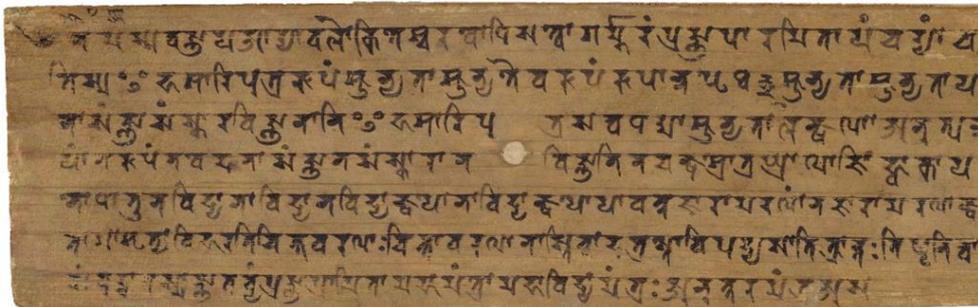
「そうだ。正式には、韻図とか等韻図という。大雑把に言えば、縦に同じ声母、横に同じ韻母を配して、交わった所にその発音を持つ漢字を置いたものだ。基本的な構造は五十音図と同じだな。ただ、中国語は音節数が多いので、43枚の図表を用いている」

「偶々よく似た構造になったのですか？」

「いや、どちらも悉曇学の知識に基づいている」

「シタンガク？」

「インドで仏教経典を記した主要言語である梵語（サンスクリット）を読むために、それを記した梵字（悉曇文字）の綴りと発音を研究するのが悉曇学だ。梵字はこんな形をしている。



法隆寺旧蔵の梵本般若心経（部分、Wikipedia より）

梵語の音声は非常に複雑だから、文字を読むためにかなり高度な音声学の知識を必要とするのだ。そのようにして音声の知識が身に付くと、今度は自分たちの言語の音声を持系的に把握したいという欲求が中国でも日本でも起こった。あるいは、中国で悉曇学を学んだ学僧が初期の韻図を日本に持ち込んで、それをヒントに五十音図を作ったのかも知れない」

「時代的には韻図の方が早いのですか？」

「おそらくそうだと思うが、確実なことは分からない。現存する最古の五十音図は11世紀初頭のものだから、原型は10世紀にはあっただろう。韻図の方は、現存するのが宋代の版本を復刻したもので、祖型となるものは唐末か唐代中期に遡る可能性はあるが、決定的な資料はない」

「五十音図って、もっと最近のものかと思っていました」

「まあ、‘いろは歌’と同じくらいの時期だろう」

「悉曇学の影響はどのような所に見られるのですか？」

「全部だな。まず、アイウエオという順番が梵字の配列だし、ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワという配列についても、破裂音・破擦音を調音点（発音部位）が奥の方か

ら前の方へと並べて、最後に持続音を置くというのは梵字の配列そのものだ。日本語のサ行は古くは破擦音だったことが分かっているし、ハ行は平安時代には両唇摩擦音のΦでもっと古くはpだったことも分かっている。それらを考慮すれば、五十音図の配列は梵字と完全に一致する」

「韻鏡の配列も同じですか？」

「いや、少し違う。韻鏡は調音点が前の方から、つまり唇音（p系）が一番右で、次に舌音（t系）、そして牙音（k系）と続く。五十音図とは逆だな。その後に歯音（ts/s系）、喉音（h系）、最後に来母（l）と日母（jɯ）が来る」

「前に36字母が示された時、この配列でした。あれは韻鏡に従っていたのですね」

「そういうことだ」

「これを見ると、左端に広韻の韻目が記されていますね」

「うむ。韻書にはすべての音節が登録されているから、その小韻（音節）の代表字を韻図の中に登録していったのだ。その際、切韻系韻書の韻ごとに図表化をしたので東韻から始まるという訳だ。ただし、韻鏡では平上去入の全声調を同時並行で記している」

「ということは、韻鏡とは広韻を、というか切韻のいずれかのバージョンを図表化したものと考えればよいのですか？」

「今はそれでよい。切韻と韻鏡の体系的なズレについては、テーマごとに少しずつ考えることにしよう。まずは韻鏡の構成を知ることが肝心だ」

5. 韻鏡の構成（清濁と等位）

「とりあえず用語を確認しようか」



「右端の‘内轉第一開’というのは何でしょう？」

「韻鏡では43枚の図があって、各図のことを‘転図’というが、‘第一’は文字通り、1枚目の転図ということだ。普通は一枚目の転図を略して‘第1転’と呼んでいる。そして、それぞれの転図は‘内転’あるいは‘外転’と名付けられている。その正確な意味はよく分からないが、一般にはəのような中舌・後舌系の主母音を含む転図が内転、aやεのような前舌系の主母音を含む転図が外転と理解されることが多い。最後の‘開’は-u介音を持たない音節、すなわち‘開口’のことだ。-u介音を持つ場合には‘合’となる。ただし、韻

鏡の表示はこのような一般的な説明だけでは理解できない場合もある。要するに、‘第一’のような番号以外には、右端の情報には不明な点が多いということだ。上段を見てくれ」

「唇音や舌音の中に、清・次清・濁・清濁とあります」

「これらの用語は韻図ごとに表現が異なるが、今ではそれぞれ全清・次清・全濁・次濁と呼ぶのが一般的になっている。それぞれが表す音は以下の通りだ」

清（＝全清）：無声無気音（p/t/k など）、無声摩擦音（h/s など）

次清 ：無声有気音（p^h/t^h/k^h など）

濁（＝全濁）：有声の破裂・破擦・摩擦音（b/d/g/dz/z/fi など）

清濁（＝次濁）：鼻音（m/n/ŋ など）、側面音（来母の [l]）、接近音（喻母の [j]）

「全濁・次濁という用語は今までも出てきましたね。清音の無気と有気はこれまでは区別していませんでした」

「ふむ。清音の無気と有気に関しては、中古音と現代音とで対応は変わらないので、あまり気にする必要はない」

「横の段は声調ごとに4段に分かれています。これは韻母の違いを表しているのでしょうか」

「そういうことだ。この段は、上から1等・2等・3等・4等と呼ぶ。1等と2等は-i-介音を持たない直音、3等と4等は-i-介音を持つ拗音だ。第1転（1枚目の転図）では、東韻の音節が主に1等と3等に配置されている」

「反切系聯法で2類に分かれた通り、直音と拗音の2種類の韻母があるのですね」

「うむ。ついでに、第1転に見られる広韻の反切と韻鏡のズレについても一つ触れていこうか。広韻では‘豊’の反切は‘敷空切’だった。そのため、反切系聯法では東や同等などと同じ直音のグループに入れた訳だが、韻鏡を見ると3等にある」

「本当だ。豊は唇音次清の3等にありますが。どういうことでしょうか？」

「実は切韻残巻などによって、もともと豊の反切は‘敷隆反’だったことが分かっている。つまり、拗音なのだ。しかし、玄宗皇帝（在位712～756）の諱（いみな）が隆基だったので、それ以降は隆の字が使えなくなった」

「避諱（ヒキ）ですね」

「そうだ。それで他の字に代えたのだが、8世紀にはすでに豊は直音化していたので、反切下字を空という字に代えてしまったのだ」

「豊が拗音から直音に変わったというのはどういうことでしょうか？」

「それは軽唇音化という現象に関わる問題だ。このテーマの詳細は来週以降にしよう」

「分かりました」

「なお、東韻の拗音のグループでは、3等だけでなく、歯音の2等や4等、そして喉音の清濁（＝喻母）の4等にも字があるが、これも来週以降に説明する」

6. 直拗と開合

「ところで、前回の宿題はやったかな？」

「あ、平声唐韻の韻母が何種類かを反切系聯法で調べるやつですね。2種類に分かれました。こんな感じです」

- ① 唐 (徒郎切) ② 郎 (魯當切) ③ 當 (都郎切) ④ 倉 (七岡切) ⑤ 岡 (古郎切)
 ⑥ 桑 (息郎切) ⑦ 康 (苦岡切) ⑧ 荒 (呼光切) ⑨ 黄 (胡光切) ⑩ 光 (古黄切)
 ⑪ 湯 (吐郎切) ⑫ 滂 (普郎切) ⑬ 汪 (烏光切) ⑭ 鴛 (烏郎切) ⑮ 炕 (呼郎切)
 ⑯ 航 (胡郎切) ⑰ 茫 (莫郎切) ⑱ 蔵 (則郎切) ⑲ 囊 (奴當切) ⑳ 傍 (歩光切)
 ㉑ 印 (五剛切) ㉒ 蔵 (昨郎切) ㉓ 觥 (苦光切) ㉔ 幫 (博旁切)

「直接系聯しなかったのは、21番の剛と24番の旁ですが、剛は5番の岡と同音で、旁は20番の傍と同音でした。そして、5番と10番に同じ反切上字が使われているので、黄色と青は必ず韻母が異なっているはずです。そして、現代音から判断すれば、その違いは黄色のグループが介音-uを持たない開口、青のグループが介音-uを持つ合口だと思います」

「よろしい。では、唐韻が韻鏡でどのような配置になっているか見てみよう。2枚の転図に分かれていることを確認してくれ」

	齒音		舌音		喉音		音		齒音	
	清濁	濁								
唐	○郎	○航	○航	○航	○桑	○藏	○倉	○藏	○臧	○莊
陽	○穰	○良	○羊	○香	○常	○商	○昌	○昌	○昌	○章
蕩	○朗	○沆	○沆	○沆	○類	○類	○類	○類	○類	○類
養	○穰	○兩	○響	○響	○上	○上	○上	○上	○上	○上
宕	○浪	○吭	○盎	○盎	○夜	○夜	○夜	○夜	○夜	○夜
漾	○讓	○亮	○向	○向	○尚	○尚	○尚	○尚	○尚	○尚
鐸	○落	○涸	○臈	○臈	○索	○索	○索	○索	○索	○索
藥	○弱	○詭	○詭	○詭	○約	○約	○約	○約	○約	○約

	音		牙音		舌音		唇音	
	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁
印	○強							
聊	○強							
仰	○強							
抑	○強							
軻	○強							
愕	○強							
虐	○強							

「韻鏡では唐韻の唇音は開口という解釈なのですね」

「韻鏡では転図によって、唇音を開口に置いたり、合口に置いたりする。しかし、p~p^w ~pu という円唇性の度合いが韻鏡の配置に反映しているかどうかについては、今のところ何とも言えない」

8. 16 撰

「広韻の韻は全部で 206 韻と非常に多い。それらの音価を個別に考えるのは大変だから、通常は似た韻をひとまとめでした撰という概念を用いている。例えば、東韻・冬鍾・鍾韻をまとめて通撰という。この場合、対応する上声・去声・入声の韻も含む。このようなグループを 16 にまとめた 16 撰というものがよく利用される。206 韻と 16 撰の関係を表にしたものがあるので、その部分を引用しておこう」

表 1 「廣韻」韻目および四声相配表

〈平声〉	〈上声〉	〈去声〉	〈入声〉	〈撰〉
1 東獨	1 董獨	1 送獨	1 屋獨	通
2 冬鍾		2 宋用	2 沃燭	
3 鍾	2 腫獨	3 用	3 燭	
4 江獨	3 講獨	4 絳獨	4 覺	江
5 支脂之	4 紙旨止	5 寘至志		止
6 脂	5 旨	6 至		
7 之	6 止	7 志		
8 微獨	7 尾獨	8 未獨		
9 魚獨	8 語獨	9 御獨		遇
10 虞模	9 麌姥	10 遇暮		
11 模	10 姥	11 暮		
12 齊獨	11 齊獨	12 霽祭		蟹
		13 祭		
		14 泰獨		
13 佳皆	12 蟹駭	15 卦怪夬		
14 皆	13 駭	16 怪		
		17 夬		
15 灰哈	14 賄海	18 隊代		
16 哈	15 海	19 代		
		20 廢獨		
17 眞諄臻	16 軫準	21 震稕	5 質術櫛	臻
↑	↑	↑	↑	
18 諄	17 準	22 稕	6 術	
19 臻			7 櫛	
20 文欣	18 吻隱	23 問獨	8 物獨	
21 欣(殷)	19 隱	24 厥獨	9 迄獨	
22 元魂痕	20 阮混很	25 願恩恨	10 月沒	
23 魂	21 混	26 恩	11 沒	
24 痕	22 很	27 恨		
25 寒桓	23 旱緩	28 翰換	12 曷末	山
↑	↑	↑	↑	
26 桓	24 緩	29 換	13 末	
27 刪山	25 漣產	30 諫緡	15 黠	
28 山	26 產	31 禡	14 黠黠	
1 先仙	27 銑緡	32 霰線	16 屑薛	
2 仙	28 緡	33 線	17 薛	

3 蕭宵	29 篠小	34 嘯笑		効
4 宵	30 小	35 笑		
5 肴獨	31 巧獨	36 效獨		
6 豪獨	32 皓獨	37 号獨		果
7 歌戈	33 哿果	38 箇過		
↑	↑	↑		
8 戈	34 果	39 過		假
9 麻獨	35 馬獨	40 禡獨		
10 陽唐	36 養蕩	41 漾宕	18 藥鐸	
11 唐	37 蕩	42 宕	19 鐸	
12 庚耕清	38 梗耿靜	43 映(敬)諍勁	20 陌麥昔	梗
13 耕	39 耿	44 諍	21 麥	
14 清	40 靜	45 勁	22 昔	
15 青獨	41 迥獨	46 徑獨	23 錫獨	
16 蒸登	42 拯等	47 證嶝	24 職德	曾
17 登	43 等	48 嶝	25 德	
18 尤侯幽	44 有厚黝	49 宥候幼		流
19 侯	45 厚	50 候		
20 幽	46 黝	51 幼		
21 侵獨	47 寢獨	52 沁獨	26 緝獨	深
22 覃談	48 感敢	53 勘闞	27 合盍	
23 談	49 敢	54 闞	28 盍	咸
24 鹽添	50 琰忝儼	55 豔忝醜	29 葉帖	
25 添	51 忝	56 帖	30 帖	
26 咸銜	53 賺檻范	58 陷鑑梵	31 洽狎	
27 銜	54 檻	59 鑑	32 狎	
28 嚴凡	52 儼	57 醜	33 業乏	
	↓	↓		
29 凡	55 范	60 梵	34 乏	

平山久雄 (2022) 『中古音講義』 pp. 29-30 より

「これを見ると、そもそも広韻の韻の配置が 16 撰のようなまとまりを意識してなされているように見えます」

「その通りだ。16 撰の用語は宋代に作られたと考えられるが、その概念自体は切韻の段階からあったということになる。上の表でもまだ分かりにくいので、より分かりやすくするために、撰を韻尾と主母音の広さによって 2 類に分けると、次のようになる」

	ㄉ・ㄊ 韻尾	-i	-u	-m	-n	-ŋ	-uŋ
/a/系	果・仮	蟹カイ	効	咸カン	山	宕トウ・梗コウ	江
/ə/系	遇	止	流	深	臻シン	曾ソウ	通

「最後の-uŋ というのは一つの韻尾なのですか？」

「広韻においては、かなり前から-ŋ で終わる韻が多すぎるのが問題視されてきた。しかも、広韻の韻の配列から見ても、通撰（東・冬・鍾韻）・江撰（江韻）が冒頭に置かれるのに対して、宕撰（陽・唐韻）・梗撰（庚・耕・清・青韻）・曾撰（蒸・登韻）はそれとは離れて、かなり後ろの方に配置されている。そこで、韻尾に何か違いがあるはずだとうことで、いくつかの説が出た。その中で、通撰と江撰は円唇性を帯びた ŋ なのではないかという三根谷徹の仮説が、日本では比較的有力な説になっている。理論的なものではあるが、16 撰

の整理には都合がいいので、ここでもそれに従っておく。表記法は-uŋ のほかに-wŋ や-ŋw などがある」

「16 撰は 206 韻よりは格段に簡略になりましたけど、それでもまだ覚えるのは大変そうです」

「最初は上の表を見ながら、実際に漢字を当てはめてみればいい。/a/系の主母音は [a] [a] [ɛ] などだが、日本漢字音（の旧仮名）ではアかエになる。一方、/ə/系はイ・ウ・オになる。例えば、‘雨’は韻尾なしで日本漢字音‘ウ’だから、/ə/系の遇撰だし、‘高’は北京音 gāo と日本漢字音コウ（旧仮名‘カウ’）より韻尾は-u で、/a/系だから効撰だ。どの韻に属するかを覚えるのは大変だが、どの撰に属するかは比較的容易に分かる」

「なるほど。確かに所属韻を調べるよりも簡単ですね。というか、撰を知ると所属韻も調べやすくなりますね」

9. 等位の違い

「先週、‘端’の音韻情報が‘山合一平桓端’と記された場合、‘山撰合口一等平声桓韻端母’の略だと言ったことを覚えているかな。一応、今の段階で用語は一通り出て来たことになる。山撰は広い主母音で-n 韻尾、合口だから-u-介音あり、韻鏡で1等に配置され、平声桓韻に属して、端母だから t-の声母を持つということになる」

「なるほど、大体 tuan のような音だということはイメージできます。しかし、まだ1等と2等の違いとか、3等と4等の違いも分かりません」

「そうだなァ、真面目にやるとかなり時間がかかるので、まずは大雑把な理解を目指すことにしようか。韻鏡の祖型が仮に8~9世紀に出来たとして、まずは/a/系から」

	山撰開口 (21・23 転)	山撰合口 (22・24 転)	効撰 (25・26 転)
1 等	-an	-uan	-au
2 等	-an	-uan	-au
3 等	-iɛn	-iuɛn	-iɛu
4 等	-iɛn	-iuɛn	-iɛu

「音価は後期中古音のものだ。3等と4等の介音の違いが気になるかも知れんが、今日の所は、そこは無視してくれ。来週以降、少し触れる機会があるだろう。次は/ə/系だ。こちらには主母音のバリエーションはない。したがって、直音の1等韻と拗音の3等韻しかない。2等韻と4等韻がないというのが、/a/系と決定的に違う点だ。開口と合口は異なる転図だが、以下には簡略化してまとめ、合口を(u)とした」

	臻撰 (17~20 転)	曾撰 (42・43 転)
1 等	-(u)ən	-(u)əŋ
2 等	×	×
3 等	-i(u)ən	-i(u)əŋ
4 等	×	×

「こちらは随分スッキリしていますね」

「実際には、拗音開口の場合、主母音はほとんど聞こえなかつたろう。音価再構の際、人によっては主母音を非常に小さく書いたり、短くて弱いことを示す記号を付けたりする。我々が唐詩を読む時に採用した‘ざっくり中古音’でも臻撰3等は-in にしている」

「先ほどの16撰の表と、韻鏡の表示を比べると、/a/系が外転、/ə/系が内転と記されているようです」

「大体はそうなのだが、中には微妙なものもある。臻撰は/a/系だが外転、果撰・宕撰は/a/系だが内転だ」

「どういうことでしょうか？」

「臻撰の外転はよく分からない。果撰と宕撰については、韻鏡の配置を見ると内転である理由が分かる。宕撰（唐韻・陽韻）についてはすでに見た。第31転と第32転だ。果撰（歌韻・戈韻）も見てみよう」

	齒音		舌音		喉音		齒音		内轉第二十七合									
	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁										
歌	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
箇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

	齒音		舌音		喉音		齒音		内轉第二十八合									
	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁	清濁	濁										
戈	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
果	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
遇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

「あ、分かりました。宕攝も果攝も1等韻と3等韻しかない。つまり、配置が/a/系と同じです。2等韻も4等韻もないので、韻鏡では内転としたということでしょうか」

「ふむ。おそらく、そういうことだろう。しかも、果攝の主母音は中古音では[a]だったが、宋代以降は現代音と同じように北方で[x]、南方で[o]になったと思われるから、その意味でも、宋代には内転とするのが自然だったと思われる」

「なるほど」

10. 卒業試験

「あと2週間もすれば卒業式だろう。今日までで中古音の最低限の基本概念はやったので、最後の宿題を出そうかな。言うなれば、卒業試験だ」

【問題】果攝開口1等平声歌韻見母の‘歌’と、仮攝開口2等平声麻韻見母の‘家’の中古音はそれぞれ以下のように再構されている。その根拠を考えよ。

歌：[ka] (aは後舌広母音)

家：[ka] (aは前舌広母音)

北京語と日本語の知識をフルに使うこと。必要であれば、韓国語(歌・家ともに가[ka])とベトナム語(歌 ca、家 gia)の表記を参考にしてもよい。【現代ベトナム語の発音は参考にならない。歴史的表記である】

「うわ、何だか本格的な問題ですね」

「参考書を見ないで、自分で考えなさい。頭の体操には持ってこいだ。来週は、この問題の解説を含めて、中国語音韻史研究の黎明期の話しよう。ところで、大学に入ったら忙しくなるだろう。この勉強会はどうするかな」

「もちろん続けます。先生さえ宜しければ、ぜひお願いします」

「そうか。ワシは暇だから構わないが、大学生の勉強も真面目にやるとなかなかキツイぞ」

「好きな道ですから、大丈夫です」

「よし。ただし、卒業試験に合格したらの話だな」

「ううっ。頑張ります！」